

予備校教師からの提言

竹内久顕著 高文研
2001年 220p. 1,400円(税別)

読みやすい筆致で書かれたこの本の魅力をあげれば、まず次の2点でしょう。

一つは、予備校の実情がよくわかるということ。世間では予備校についてかなり多くの誤解があり、著者はそれをていねいに解きほぐそうともされています。実際、高校生、卒業生の多くは予備校で学んでいるのですから、誤解を持ったまま偏見の目で見るのはよいことではないでしょう。私は著者も勤務する東京の駿台予備校に通学した経験があるので、「なるほど、そうだったのか」と当時のことを思い出しながら興味深く読みました。

もう一つは、日本史大学入試問題と関わって、最近の歴史学の研究動向がわかるということ。著者は研究熱心で、常に歴史学の研究動向を取り入れつつ(高校教員もそうあるべきだ、というのが著者の主張ですが)、入試問題を分析しています。高校で特に日本史を教えている人は、これまで当然のように教えてきたことが最近では違う学説だと知って、驚かれるのではないのでしょうか。私もかつて高校で日本史を教えていたので、その意味でも懐かしく思いながら読みました。

その他、随所に表れている著者の「平和教育」へのこだわりにも共感できます。予備校教師をしながら、教育科学研究会の「平和・人権と教育」部会で活躍されたり、日本教育学会平和教育専門委員会での中心的な活動をされたりしています。「新しい歴史教科書をつくる会」の主張への反論も、予備校生との対話という実践場面を交えながら、歴史学の研究動向をふまえて書かれていて、明快です。

高校教師に対する痛烈な批判もあり、これについては、疑問をもたれる人も多いかもしれません。現代の予備校生・高校生に対する見方や、学力論、あるいは大学入試問題のあり方についての著者の意見には、私も必ずしも同意しません。が、いずれにしろ一石を投じる内容で、議論の価値がありそうです。御一読をおすすめします。

愛知県立大学文学部児童教育学科
久保田貢

仲間と誇りと夢と

メキシコの貧困層に学ぶ
工藤律子著 JULA出版局
2002年 302p. 1,800円(税別)

8年ほど前のメキシコへの旅で、非常に印象に残ったことが二つある。一つは、メキシコシティのパロックから現代的な高層建築まで混じり合った町並みが、いつの間にか丘陵の斜面に色とりどりに立ち並ぶ雑多としか言いようのない家並みに変わっていくこと。なかにはバラックのような建物も沢山あった。これが、本書で取り上げられている「コロニア・ポプラーレ」である。もう一つは、田園地帯で見かけた、鉄条網で囲まれた広大な荒地。土地改革が進まず、牛や馬が草を食む広々とした牧場ばかりでなく、使わない土地まで大地主が囲い込んでいる。地味が豊かで、農民にとっては喉から手が出るほど欲しい、しかし手の届かない土地だという。

「仲間と誇りと夢と」は、先の二つのことが、いかに切実で重大な現実をあらわしていたのか、ということを教えてくれた。コロニア・ポプラーレ、都市周縁に連なる「スラム」は、土地を持たない農民が都会で下層労働者となり、共有地などを占拠して住み着いた地域である。政治に翻弄されてきた住民達は、自らの手で住民運動の組織を作り、NGOなどと協力して、土地の獲得や居住環境の整備に取り組んでいる。コロニアを票田と見込んで、住民組織を分断し懐柔しようとする政党、分断された住民同士の確執、より富裕な都市の住民からの差別、住民の中での階層分化など、彼らを取り巻く状況は厳しい。

著者は、コロニア・ポプラーレの生活改善運動を研究する過程で知り合った人々との交流を通して、貧困層が、自らの手で、より人間らしい生活を手にするために、協力しあい助け合って生きる姿を、生き生きと描き出す。貧困と差別の問題は、解決にはほど遠いけれど、努力が報われることを信じ、自分の存在に誇りを持って懸命に生きる人々の姿は、私たちが忘れてしまったものを思い起こさせる。物質的な豊かさのなかで、夢も誇りも見失っている私たちこそ、人間としていかに貧しいことか。

東京都立江北高等学校
川路靖子

なるほど！日本経済早わかり

池上彰著 講談社
2002年 254p. 1,500円（税別）

現場では、「経済学習は難しくてよくわからない」という声をよく聞く。だから、経済学習は敬遠されがちである。本書は「景気が悪いことはどういうことか」「不良債権に苦しむ日本の銀行」「日本銀行は何をしているか」「国債は誰から借金しているか」「円の価値は下がっている」「元気がない株式市場」「日本はよみがえるのか？」の7章からなり、NHK「週刊こどもニュース」のキャスター池上彰氏が難しい経済の仕組みとキーワードの基本をわかりやすく解説してくれている。これさえ読めば、今の日本経済の現状は理解できるはずである。現場の教師にとってはありがたい本である。

しかし、物事の捉え方が一方的な箇所がいくらかあり、読者の判断を一方の方向に導いていくおそれがないわけではない。たとえば「不良債権処理が先か、景気対策が先か」という項を立て、「双方の要素が複雑に入り交じっている」と述べている。それに対して、「小泉政権は、不良債権が大量にあるために景気回復が進まないと考え、不良債権処理を急ぐように銀行に指導しています」とし「不良債権処理を急ぐように」という立場で論を進めている。小泉・竹中路線での不良債権処理は、大量の倒産と失業者は避けられずデフレを加速することになる。そのことには違う項で軽く触れている程度だ。もう一方の立場、すなわち不良債権処理よりも、実体経済をよくし、景気を回復させることが先決であるということには言及していない。また現在の不良債権処理問題は、「バブルの後始末」から「日本経済の構造調整」つまり「非効率な企業」をつぶす小泉「構造改革」に中心が移りつつあると日銀も認めるところだが、そのあたりの区別もされていない。

たしかに本書は日本経済の基本知識は提供してくれるが、政策の価値判断となると、やはり一方的だと言わざるをえない。『「構造改革」という幻想』（岩波書店、山家悠紀夫）、「入門バクロ経済学」（朝日新聞社、金子勝・テリー伊藤）を合わせて読んでいただければ、少しは違う立場から経済政策を見られるのではないかと思う。

兵庫県立尼崎小田高等学校 福田秀志

紙数の都合で取り上げられませんが、
このほか編集委員からのおすすめ本

靖国の戦後史 田中伸尚著 岩波新書

国の靖国関与や遺族への承諾なき合祀に対して、抗議の声をあげ裁判などで闘ってきた人々たちを取材。なぜ公式参拝に反対するのか、なぜ反対を押し切って公式参拝するのかそれぞれの主張がよく整理されている。

私たちが書く憲法前文 大塚英志編・監修 角川書店

『中央公論』の読者参加企画「夢の憲法前文をつくろう」に応募したなかの、14歳から88歳までの126人が書いた憲法前文である。授業のなかで生徒に書かせてみてはどうだろう。

日本近現代女性史 佐藤能丸・阿部恒久著 芙蓉書房

全6章のうち半分が戦後史。83テーマが全て見開き2ページで構成されており、その中に通史と史料がコンパクトにまとめられている。教材としてすぐ活用できる。

戦争プロパガンダ10の法則 アンヌ・モレリ著 草思社

戦争を推進する側の理屈は常にこの様である、という10項目。

③敵の指導者は悪魔のような人間だ。

⑤われわれも誤って犠牲を出すことがある。だが敵はわざと残虐行為におよんでいる。

⑩この正義に疑問を投げかける者は裏切り者である。

この理屈は、日本の戦争でも、ブッシュの戦争でも、使われたし、使われつつある。

戦争広告代理店 高木徹著 講談社は上記プロパガンダの最も典型的で現代的なケース、ボスニア戦争を調査したNHK記者のルポである。いまや戦争も広告会社が演出する時代になった。

なぜ牛は狂ったのか マクシム・シュワルツ著 紀伊国屋書店

狂牛病にいたる歴史を世界の各地域に溯って検討したもの。3世紀におよぶ姿なきウィルスの正体を追跡している。

人間回復の経済学 神野直彦著 岩波新書

現代を、工業社会の終焉ととらえる著者は、知識社会への転換を説く。スウェーデンの例は“目からウロコ”で、日本の都市再生の例にも励まされる。

一海軍士官の太平洋戦争 齊藤一好著 高文研

日米開戦を知った時、「恐れおののいた」という著者の、正直で率直な体験録。士官という立場で知り得た貴重な情報が多く、戦争の真実を学ぶことができる。
